

日本と諸外国との社会的文化的背景の比較

その1 日本とヨーロッパ

小 林 淑 哉

一章 比較の目的

二章 比較の対象（諸外国をいかに分類するか）

三章 特性を生み出す要因

四章 比較の前提

一節 日本人の特性は悪徳なのか

二節 日本人は世界でユニークな民族なのであろうか

五章 日本とヨーロッパの社会的文化的背景の比較

一節 respect と差別

二節 社交性につきあい

三節 「人生を大事に」と「身内意識」

四節 議論好きと議論下手

五節 個性と察し合い

一章 比 較 の 目 的

一節 日本のこれから進むべき道は、プラント輸出、技術輸出、海外投資、海外における工場経営等だといわれている。これらの事業を成功に導くためには多くの障害を乗り越えねばならない。その一つとして、海外で活躍するマネジャーやエンジニアが数十万人必要だと言われている。その多くは理・工科系の大学を卒業する青年であることは言うまでもない。彼等は海外へ進出して、世界各国の人々と商談をまとめ、現地人と生活を共にし、あるいは現地人を指導して行かねばならない。その際、気候風土、風俗習慣、生活様式、ものの考え方、宗教、法律、税制等の違いから、見込み違いが生れたり、違和感に耐えられなくなったり、孤立・孤独に陥ったりもする。ひいては相手国民に嫌われ、信用を失い、更には日本人全体に対する悪い印象や誤解を与えることさえある。日本人には当然と思える振舞いや考え方、いや日本では美德と

さえ思えることが、相手国民の感情を逆かなですることさえある。従って海外に進出するマネジャー、エンジニアにとって、日本と世界各国との社会的・文化的背景の違い点あるいは類似点を知悉しておくことは最大の課題といわねばならない。

二節 戦後の日本において、「民主的」、「民主化」、「民主主義」という言葉は、いたるところで、あらゆる時に耳にする。そして民主主義とは何か、すなわち民主主義そのものについては、枚挙に遑なく論じられてもいるし、理解もされている。しかし民主主義を生み出したもろもろの必然的条件については、あまり体系的・総合的に探求されてはいない。民主主義が生れた欧米のどこかで、正しい民主主義がもしも実現しているとすれば、それは、民主主義を生むに至った欧米のもろもろの伝統、そしてそこから生れたもろもろの近代思想が庶民一人一人の心に、一人一人の肌に沁みついているからに他ならないと考える。そしてそのもろもろの伝統、もろもろの近代思想によって、庶民の意識構造及び行動が濾過されているからこそ、民主主義が正しい歩みを続けているのではないだろうか。ところで、日本の民主主義はそれらもろもろの伝統、近代思想に濾過されているだろうか。ヨーロッパで二千年かかって民主主義を、はぐくみ育ててきた温床ともいふべきこのもろもろの伝統、近代思想が、日本にある筈がない。それならばこの伝統、近代思想に代るべきものが日本にあるだろうか。増田四郎氏は次のように述べている¹⁾。

日本国家は、とくに日清・日露の戦争を経て、富国强兵をモットーに、とにかく近代国家の列に加わることになったのですが、日常の社会生活のルール、あるいは民主主義の社会をつくるための民衆全体のトレーニングといえますか、訓練というものが、ほとんど無視されてしまいました。その一つのあらわれが、自治、つまりセルフ・ガヴァーメントということの本質が、まるで地について理解されていないことからもうかがわれます。政府へ泣きついて、できるだけ多くの補助金をとって来る町長や市長がよいのだといったいわゆる市民意識不在の自治観が、いまだに根づよく残っているのです。一律なコントロールをめざす中央権力に抵抗する姿勢としての地域住民の自治意識というものは、最近のいわゆる市民運動をのぞいては、ほとんど見うけられない淋しさです。

同じことは、先進国の制度を模倣した議会政治についても、もっとはっきりと言えます。政治家の意識構造というものは、まったく前近代的であります。政治家にいわせれば、いろいろ異論があるのですが、外から見ますならば、あのわけのわからない人的結合としての派閥争いは、どうも理解に苦しみます。また選挙の際

にあらわれる選挙民の動きについても、あれが社会生活や国家生活の向上をはかるためのもっとも基本的な権利行使の仕方であろうかと疑わしくなるような、種々のいまわしい行為が横行しています。

してみると、明治以来急速に近代化が行なわれたというのは、実は形の上、制度の上だけのことで、一般民衆の精神の変革といえますか、社会生活をよりよくするための主体的な近代化の経験というものは存在しなかったのではないか。

上記増田氏の言葉によれば、日本の近代化は「実は形の上、制度の上だけのことで」あった。言いかえれば日本の民主主義は日本のタテマエにとどまり、民主主義とは異質なものがホンネにひそんでいるのではないか。それは、上記引用文の中にもある通り、「民主主義の社会をつくるための民衆全体のトレーニング」が無視されているからである。この「トレーニング」を無視している日本の背景とはなにか。欧米で民主主義が芽生えた背景とはなにか。それはとりもなおさず彼我の社会的・文化的背景を比較することによって究明されたと考えるのである。

三節 外国語学習あるいは外国語教育の面から考えて、その外国語を使う国と日本との社会的・文化的背景の比較は必須な分野となっている。米国の構造言語学の泰斗、C.C. Fries は次のように述べている²⁹。

The linguistic meanings of our utterances—the lexical meanings and the structural meanings, to which we give great attention—constitute only part of the total meaning of these utterances *as they function practically in a society*. In addition to the regularly recurring responses to the lexical items and to the structural arrangements, there are also throughout a linguistic community recurring responses to unique whole utterances or sequences of utterances. Rip Van Winkle's simple utterance "I am a poor quiet man, a native of the place, and a loyal subject of the king. God bless him!" almost caused a riot, not because of the linguistic meaning signalled by the lexical items and the structures, but because the unique utterance as a whole, now, after the American Revolution, meant to the group that he was a confessed enemy of the newly established government. Twenty years before, this statement would have caused no such reaction. It would have meant simply that he was a "good" citizen. The linguistic meaning was the same as it would have been

twenty years earlier; only its "social" or "cultural" meaning had changed. The utterances of a language that function practically in a society therefore always have both linguistic meaning and social-cultural meaning.

(われわれの発話がもっている言語的意味というもの——それは辞書的意味と構造的意味とであり、われわれはこれらに非常な注意をはらうのであるが——は、これらの発話が、実際に、ある社会でその用を果している際における意味全体からすれば、そのわずか一部を成しているにすぎない。辞書の項目および構造的配列に対して規則的に繰り返される反応のほか、特定言語社会全体にわたって、特異な、全発話あるいは発話の連続体に対して繰り返し生ずる反応もある。たとえば、リップ・ヴァン・ウィンクルの「わたしは、あわれな、おとなしい男です。この土地の生れで、王様の忠良なる臣民でございます、王様万歳」という単純な発話は、ほとんど、暴動をおこしそうになったが、これは、辞書の項目と構造とによって合図されている言語的意味のためではなく、この、アメリカ独立戦争の後という折に、この特異な発話全体が、リップは新しく確立された政治の明白な敵であるということ、その場の人々に意味したからである。もしもこれが、そのときより20年前のことであつたら、リップのこの言は、けっして、このような反応をひきおこしはしなかったであろう。それは、単に、リップが1人の「善良なる」市民であることを意味したにすぎなかったであろう。言語的意味からすれば、20年前の場合も、この場合も、同じであつたはずである。ただ、その「社会的」あるいは「文化的」意味が変っていたのである。だから、ある言語の発話というものは、それが実際にある社会でその用を果す場合、言語的意味と同時に、社会的・文化的意味をも、常に、もっているものなのである。——安井稔訳)

以上の引用で Fries が述べていることは、単語の知識、文法の学習と同時に、いやそれ以上に、その国の社会的・文化的背景を知らなければならないということである。更に、Fries の高弟と言われる Robert Lado も次のように述べている³⁾。

母国語と外国語、母国文化と外国文化の比較の結果を利用すれば、われわれは研究上の問題点を指摘することができ、個人個人が独力で高度の意義を持つ、はなはだ必要な実験を実施することができる。(上田明子訳)

しかし、フリーズを中心とする構造言語学者たちは言語そのものの研究に終ってい

る。言語と文化の接点の問題に肉迫して行ったのは、Noam Chomsky を初めとする言語学者たちであった。鈴木孝夫氏は次のように述べている⁹⁾。

歴史主義的な通時比較言語学にしても、その後の構造主義的な共時記述言語学にしても、研究の中心課題はほとんどの場合、言語それ自体の性質や構造の解明であった。したがって言語研究の重点が音韻、そして文法という言語形式に置かれており、言語という人間にとって最も基本的な認識伝達の手段の、いわば内容をなす部分、即ち意味の問題は言語研究以前あるいは以外の学問分野として、長らく軽視される傾向にあったのである。まして言語と人間の行動様式との対応関係などはまったく顧みられなかった。

つまり言語という人間の文化の重要な部分を、それ自体が持つしくみや法則性の解明の研究対象としてのみ限定して考えてきたのが、近代の言語学の主流をなす態度であったと言えよう。

だが言語とは、それを使用する人間との関係、および言語以外の文化の諸側面との相関で研究されることに値する対象であり、また考え方によってはこの分野こそ最も人間的な意味における言語研究であるとも言える。……………中略……………
現在では新言語学の研究傾向が論理学と言語学の統合を目ざす方向にあることは明らかで、個別文化内において言語がどのように使用されるかは、依然として正面から取組まれずにいると言える。

以上の引用から察せられるように、言語の中に文化がひそんでおり、言語そのものがその国の文化の一側面である。そして言語から、その国の社会・文化を解明することができる。又、社会・文化を理解することによって、その国の言語をより深く把握することにもなるし、二国の社会的・文化的背景を探ることによって、両国の言語をより正確に比較対応させることができると考える。

二章 比較の対象（諸外国をいかに分類するか）

本論では、日本と諸外国を比較しようとしている。その場合、日本とイギリス、日本とフランスという具合に一国対一国の比較も大切であるが、同時にあるいくつかの国に共通するものがあれば、その最大公約数というべきものを抽出して、それを日本と比較することによって世界を一層深く理解することになり、日本が世界の中でどのような位置にあるかを知ることができる。増田四郎氏は次のように述べている⁹⁾。

たとえば封建制度一つを取ってみても、日本の場合には終始一国のなかでの封建制度であるけれども、ヨーロッパの場合にはその身分観であれ、生活様式であれ、その教養であれ、所領関係であれ、いずれも国を越えた考え方であり、制度であった。この関係は近世に至ってもかなりつよく自明のこととして残っており、総じて国際的な感覚というものは、われわれが予想する以上につよいのである。つまりかれらは共通の母体の上に立って、相互に自国の特色を発揮しているわけであるが、そういう構造、そういう常識は一体どうしてできてきたのかが問われなければならない。ところでそういうことについての紹介なり常識なりは、わが国では欠けていて、なんでも国単位に考え、イギリスはどうだ、フランスはどうだ、ドイツはどうだというふうに、日本と他の一国とを比較することに馴れているけれども、その場合にヨーロッパという共通の基盤、共通の体制の上に立った国々だという理解が足りない。

以上のことは東欧圏、アラブ圏、中南米圏等についても言えるのである。東欧圏についてはポーランドとハンガリーとでは、又ハンガリーとルーマニアとでは異質なものをもっているながら、同時に共通な点を見逃すことはできない。アラブ圏においても、モロッコとアルジェリアとチュニジアを比較すれば、それぞれ独特なものをもっているながら、同時に同質性を保持している。一国一国の異質独特な国民性については、稿を改めて論ずるとして、本論では、世界をいくつかの圏に分けて、それぞれの圏と日本との社会的・文化的背景を比較するものである。

三章 特性を生み出す要因

一つの地域、一つの国、あるいは一つの社会文化圏の特性を生み出す主要因として次のようなものが数えられる。

- (イ) 風土
- (ロ) 武力的侵略
- (ハ) 文化的侵入
- (ニ) 伝統の継承守護
- (ホ) 政治体制

(イ) ヨーロッパとは何か。先ず風土の面から考えてみよう。イギリス人に聞けば、

「我々はヨーロッパとは違う。ヨーロッパ人と一緒にされたくはない」と答える人は少くない。ある人はピレネー山脈以北、アルプス山脈以北だという。犬養道子氏は次のように述べている⁶⁾。

一冬を共に越してみてもはじめてドイツ人がわかる、とはたびたび言われることだ。が、一步進んでこうも言えよう、冬の週末をくり返し過ごしてみてもはじめてヨーロッパがわかる、と。

ここで言うヨーロッパは、その語源本来の意味を持つ。すなわち、地中海(沿岸)文化地帯(イタリア、南フランス等々)をのぞいた地帯。おおざっぱに言えば、屋根のごとくまた分離帯のごとく連なるアルプス連山以北の地帯。冬ごとに、太陽は定期便の使者にも似て、この連山を越えたかなたに行ってしまう。連山のこちら側はしたがって暗いのである。

上記引用によっても、風土が社会文化圏に大きな影響を与えるものであることが察知される。本論では、ヨーロッパとは、地中海沿岸地帯及び東欧をのぞく、ピレネー山脈以北、アルプス山脈以北を前提として論ずることとする。

(口) 武力的侵略という面から考えるならば、西欧と東欧、北欧と南欧というような大まかな分類では間に合わない。武力的侵略は著しく複雑である。ある国はアレキサンダーによって侵略され、ある民族はシーザーによって、ある地域はモンゴルによって、オスマントルコによって等々。従ってどんな侵略を受けたかによって、その影響の内容が国により、民族により、地域によって違っていることは言うまでもない。しかし、ここで力説したいことは、どんな武力的侵略にせよ、それを経験したかしないかが重大なのである。武力的侵略は日本とヨーロッパとを比較する要因にはなるが、全ヨーロッパをいくつかに分けるきめ手にはなり得ないのである。本多勝一氏は次のように述べている⁷⁾。

異民族の侵略を受けた経験が多い国ほど、自分の過失を認めない。日本人やエスキモーやモニ族は、異民族との接触による悲惨な体験の少ない、たいへんお人好しの、珍しい民族である。

「武力的侵略」という要因は、日本と他の大方の民族を区分する大きな要因となっ

ている。

(ハ) 文化的侵入は武力的侵略にともなう場合と平和的に伝播する場合があることはもちろんである。又、社会的・文化的背景に影響が少ない場合と大きい場合があることは言うまでもない。例えば、「茶」という中国語が、cha (ペルシャ語)、chay (トルコ語)、shay (アラビア語)、chai (ロシア語)、果ては、thé (フランス語)、Tee (ドイツ語) にまで広がって行く。しかしこれはせいぜい十六世紀以後のことなのでまだしも、argha (水) というサンスクリット語が遙るばるラテン語の aqua, 英語の aquarium, aquarelle, liquid と関係があるばかりか、東漸して、「開伽」という日本語になり、徒然草にまで使われていることを思うとき、あるいは、アテネ、パルテノン神殿と法隆寺の柱が共通の様式であるということを聞くに及んで、文化伝播の力強さに驚嘆するばかりである。このような文化的侵入は例を挙げれば枚挙に遑がないが、複雑に組み合わせられ、更には宗教というような大きな文化的侵入と合流して、他の国、他の社会文化圏に影響を及ぼす。従ってそこから一国の又は一文化圏の特徴を抽出したとしても多くの例外が生れてくるのは、当然のこととして認めねばならない。

又、次のようなこともある。日本の男性と結婚したオーストリアの女性と最近知り合った。彼女はウィーン生れの純粋な白人である。私は彼女に質問をした。「あなたがウィーンに帰れば、身内や親戚が迎えに来ていて、空港や駅頭で抱擁し合ったり、キスしたりなさるでしょう?」ところが、日本では夫婦でさえも、そういうことはしない。あなたが日本に帰ってきたときに、日本人の夫が空港などで愛情を率直にあらわさないことを不満に思いませんか?」と。すると彼女は、「私は人前でそういうことをするのが嫌いなのです。だから私がウィーンで高校に通っていたとき、よく友人にもっと積極的になれといわれたものでした。そういう調子だから、私にはウィーンでオーストリアの友人はいませんでした。もしも日本人である今の主人と出遭わなければ、私はきっといまだに結婚相手がなかったろうと思っています」。「それでは、御主人の友人があなたの家に来たときに、ヨーロッパでは夫婦共々、その友人を歓待しますね?」けれど日本では、奥さんがお茶位は出して挨拶するだけで奥の部屋に引込んでしまう場合が現代でもまだ多いと思うけれど、そういうことに違和感とか物足らなさを感じませんか?」ときくと、「とんでもない。人前に出るのが嫌いなので主人の友だちの相手をするより、奥へ入って本を読んでいる方が、私の性に合っているんです」。正に彼女は日本的なオーストリア人なのである。現代には欧米的な日本人がたくさん居るのと同様に。このような例外も常に存在することを銘記しておきたい。

さてそれではヨーロッパに文化が浸入してきて、ヨーロッパの文化的背景となったものは何か。犬養道子氏は次のように言う⁶⁾。

四つの要素から成り立っていて、第一はギリシアの遺産、第二はローマ文化の影響、第三がキリスト教、第四はローマに取って代わった北方の若々しい蛮族ゲルマンの伝統と、こういうことになる。……………中略……………しかし、この四つは、四本の電信柱みたいに並んでいるわけではなく、また、ギリシアが終わってローマとなりローマが亡びてゲルマンとなるという風に、はっきり時代別の区分けをされながら積木細工のごとくに積みあげられたものでもない。互いにかさなり合い、反発しあい吸収しあい、その吸収の中から新しいものを生み出しあい、といった風に、複雑で微妙な混合を、長い間かかってつくり出していったのである。

地方地方の風土気候や、ある時ある土地に支配したある豪族の性格や好みなどによっても、ひとつの土地に移り住んだゲルマンの一族の独自の生き方や性向によっても、その混合は他とちがう表現をとった。

同じキリスト教といっても、耐え忍び剛毅に暮らさねばいのちのもたない北海近いすまじいところでは、もっぱら忍耐の徳が教えられた。神のために忍び、自らに克ち、生きぬくのである。が、万物あかるく、太陽の輝きわたり鳥は歌い花は咲きみだれる南の地方では、賛美と感謝こそはキリスト教的徳と考えられた。ひとつの信仰とひとつの教義ながら、日々を生きる人間の、現実生活における表現としては、ちがうものになった。ひと口に中世のゴシック建築という。しかし、同時代のゴシック寺院を見ても、フランスのそれは、フランスを形成したゲルマン中の一族の、その風土の中での発展の結果として、きわめて繊細であり、しかも感傷の甘たるさのこれっぽっちもない一種清冽な知性美に満ちている。が、ドイツ地方のそれには、一見、人を圧する傲岸さに近い強さがありながら、よく見れば意外にもろい感傷性をただよわせ、したがって何となく甘い雰囲気がつまわっているように私には受けとられる。

ともかく、共同の、四つの要素は、時の流れの中で、かきまわされ、溶けあい、各地に独自の個性を生み出しつづけ、再びそれらの個性どうしを結びつけたり破壊したりした。

以上の引用から察せられるように、本論でいうヨーロッパとは、アルプス山脈以北、ピレネー山脈以北とし、東欧と南欧とは分離して後で論ずることにする。

(二) 伝統の継承守護という点では、ヨーロッパ、南欧、東欧を通じて、すべてに言えることである。たとえば、第二次大戦後、全ヨーロッパのどの国も、破壊された旧市街を、写真、設計図、見取図などを参考にして殆んど全部、昔のままに復興させた。それは、政府や市当局の力というよりは、市民一人一人が古い文化、伝統に懂れて、これを守りたいという強い願望があったからこそである。現代の全ヨーロッパ人にとって、ヨーロッパの古い歴史、文化、伝統は生きているのである。現代のヨーロッパを理解するために、又説明するため、ヨーロッパの古い歴史、文化、伝統を無視することはできない。一方、日本ではどうであろうか。日本にも古い歴史、文化、伝統はあるが、日本人一人一人の心の中に、毎日の生活の中に、脈々と生きているといえるであろうか。織田信長の破壊主義、明治時代の排仏毀釈による寺院等の破壊は例外かも知れないが、現在の政府行政や地方行政の中に、文化、伝統を破壊はしないまでも、積極的に擁護しようとする意欲に欠けていることは、破壊主義の裏返しに他ならない。上智大学教授、ピーター・ミルワード氏は次のように述べている⁸⁾。

地方の人と田舎を旅しながら、私は腹が立ってたずねるのです。「なぜ役所がこういう不動産屋を取りしまるとか、ひどい土地投機をおさえるとかしないんでしょうね？」友だちはさびしそうに答えます。「いやなことですけど、私たちにもどうにもならないんですよ。責任は地方の役所よりは、中央の政府の方にあるんで」イギリスでは、戦後、田舎や地方都市の外観がすばらしくよくなりました。都市町村計画省のおかげです。田舎では勝手なことではできません。古い家をこわして新しいのかえることもだめです。すべて政府の許可がいります。

又、同氏はこうも言う⁹⁾。

戦後、日本人の努力は、まず国の復興、次いで西欧化工業化に向けられました。それに夢中になりすぎたあまり、自分のこと、自分のアイデンティティは忘れてしまった。古い伝統の根から自分を切り離すことに忙しくて、とどのつまり、自分が何者で、どこからきて、なぜここにいるのかわからなくなった。そこで今、日本人同士のみならず、外人——特に日本にしばらくいて日本語を話せる外人——をまじえて、たずね合っている、ということでしょう。

歴史をふりかえって見ても日本では舶来主義が事あるごとに顔を出す。古い文化、

伝統はあっても、形骸化し、ある少数の日本人だけに脈打っているにすぎない。現代の日本人をもしも外人が理解しようとするならば、古い文化、伝統を研究しなくても究明できるとは言えないだろうか。日本人が今もし古いものを宿しているとすれば、因襲のみであって、伝統ではないと敢えて言いたい。もちろん、日本にも例外はある。それは京都等、ある種の地域の日本人である。例えば京都人の多くは、多数のヨーロッパ人と共通するものをもっている。京都とヨーロッパには古い文化と伝統がある。京都人とヨーロッパ人はその中で生れ、育った。もちろん古い文化と伝統の中には、洗練された生活のしきたりがともなう。両者は生れ育った町や国に誇りを持つ。誇りを持てば、豊かな人間味が芽生え、自分の町の文化や伝統について、他人に語り伝えたいとなる。京都に行くと、親切で思いやりのあるバスの運転手や老舗の婆さんなどによく出くわす。彼らは自分の町の古跡や神社仏閣について我々訪問者に語り伝えたい喜びにあふれているばかりか、何事によらず親切である。その癖、他人の心の中にむやみに入り込まないという節度もわきまえている。ヨーロッパ人の多くも全く同様である。

要するに、伝統の継承守護の意識は、日本人とヨーロッパ人の比較の要因にはなるが、全ヨーロッパ人同士の比較の要因とは殆んどならない。

(ホ) 政治体制こそ、東欧をその他のヨーロッパから区分する要因となっている。しかしこの際銘記せねばならないことは、「政治体制」を初めとして、(イ)から(ホ)までの五つの要因は、どれをとってみても、三十年や四十年の短期間で、一つの国あるいは一つの社会文化圏の特徴を定着させるわけにはいかないということである。それは丁度、神道思想、全体主義、軍国主義だった日本が、政治体制が民主主義に変わったからとて三十年や四十年で本当の意味での民主主義にはなり得ないのと同様である。

大宅壮一氏が述べているように⁹²、「もともこの地域は、たくさんな小国にわかれ、しばしば周囲の強大国のエジキとなり『ヨーロッパのシナ』と呼ばれていたところだ。民族的にも、スラブ系、チュートン系（ドイツ）、ラテン系が入りみだれて争ってきた」のである。従って東欧はその他のヨーロッパと同様に論ずるわけにはいかないまでも、西ヨーロッパに隣接し、侵略もされ、影響も受け、ある時には憧れもしていたので、アルプス・ピレネー以北のヨーロッパの近代性の洗礼を以前から受けていたことは間違いない事実である。政治体制が東欧とヨーロッパを区分する深い大きな要因といえるかどうかは今後相当の年月を経てみなければわからない。

四章 比較の前提

一節 日本人の特性は悪徳なのか

日本人の特性は何かと問われれば、世間体、義理人情、他人の顔色、亭主関白、あきらめ、恥等々の言葉が脳裏をかすめる。我々日本人はこれらの特性を生れおちて親から仕込まれ、親戚、知人、友人その他社会的交流の中で、身につけている。無意識の中に、これらの特性を社会的規範として生きている。時にはこれらの特性の中の一つか二つについて、批判をし反発して生きている人も多い。しかしそれ以外の特性からは逃げ出すことができずに、やはり自分は日本人なのだと悟る。井上忠司氏は次のように述べている¹⁰⁾。

ひるがえって、私自身をかえりみても、私にとって「世間体」は、とてもひとつとは思えないのである。当初は、あくまでも主体的に判断し、行動したつもりであった。しかし、あとでよくよく考えてみると、意外と「世間体」にとらわれていた自分を見出して、私はひとり、愕然とすることが多い。

ましてや、大多数の日本人が、外人と接触したとき、何かにつけて違和感をおぼえ、反発をも感ずる。その際、大切なことは、日本人としての特性で、その外人を律してはならないということである。なぜならばその外人も、我々日本人と同じように、自分の国の特性を身につけ、その特性を空気のように当然のこととして生きてきたのだから。そしてもしも外人と接触しなければならない場合には、その相手の国の特性を学ばねばならないのである。

さて、このような日本人の特性について、我々はよいものであるとか悪いものであるとか、頭からきめつけてよいものであろうか。たまたま、ある日本人が、これら特性の一つを悪用したからとて、その特性そのものが間違っているとは言えないし、ましてやそういう特性をもっている日本人全体に欠点があるとも考えられない。会田雄次氏は「世間体」について次のように述べている¹¹⁾。

私たちは世間体をかざるということを否定する必要は毛頭ない。それは倫理の最高峰へ矛盾なく到達できるものである。まさにその反対に否定するのではなく、積極的に肯定することによってそれを高める道の方を歩むべきであろう。

国民の特性そのものは大抵否定する必要も肯定する必要もない。そして会田氏の言うように、それを高める道の方を歩むべきである。しかし日本人のもろもろの特性は現実には高める道の方を歩んでいるだろうか、それとも悪用する傾向をたどっているだろうか。そして高める道の方を歩むためにはどうしたらよいのだろうか。又、源了圓氏は、日本人の特性の一つである「義理と人情」について次のように述べている¹²⁾。

「はじめ」に述べたように、もしわれわれが文学作品に現われた「義理と人情」を検討しようと思うならば、社会的事実の反映としての義理・人情と、作家が理想像として創りあげた虚構の義理・人情を区別する必要がある。このさい私は、虚構としての「義理と人情」の意義を強調しようとするものである。私はこれまでの義理ないし義理・人情の研究が、あまりにも現在の関心に傾きすぎて、今日すでに全体としては崩壊した共同体的社会構造のいわば一種の頹落現象として、あるいは残存現象として利益社会のうちに生きている義理ないし義理と人情のみに注目して、義理ないし義理・人情の習俗の理想化の試みに注目しなすぎる、ということに問題を感じる。

会田氏のいうところの「それを高める道の方を歩む」ためには、源了圓氏のいうところの「習俗の理想化の試みに注目」することが至極肝要であろうと思う。

しかし、出版された日本人非難論の多くは、国民の特性に関する現実に起った事象を素材にして批判しているのに対して、日本人賛美論の大多数は、理想化しあるいは美化した国民の特性を根拠にして論じているだけで平行線をなしている。両者が噛み合って冷厳な判断は下せないものであろうか。

二節 日本人は世界でユニークな民族なのであろうか

米国スタンフォード大学人類学部教授、別府春海氏は次のように述べている¹³⁾。

自分の文化が特殊であるということを主張する民族と、そう主張しない民族がありますね。アメリカ人なんかは、たしかに自分たちの文化はユニークだと思っているでしょうし、聞かれれば、そう答えるでしょうけれど、そんなことは大した問題だとは考えていない。ところが、日本人の方は、自分たちの文化はユニークだ、ユニークだ、と絶えず主張しているでしょう。まさにこの点にこそ、日本人のユニークさがあるのじゃないでしょうか。

又、ハーバート・パッシン氏（コロンビア大学教授）は次のように述べている¹⁴⁾。

It would have been easier to follow the fashionable trend and emphasize the uniqueness of the Japanese language. There are many people who take a particular pleasure in thinking of Japanese as unique, exotic, *sui generis*, unexplainable. In fact, they are insulted if you suggest that perhaps it is not. It is a little like the Japanese who are so convinced that Japanese cuisine is unique that they cannot believe that a foreigner can enjoy it.

“Can you really eat raw fish?” is a question that even after more than 30 of years contact with Japan I keep running into. And if I succeed in convincing my interlocutor that I do like raw fish, or at least dispose of the question one way or another, then I will be confronted with, “Well, then, how about *ankō* (the liver of the anglerfish)? Surely you foreigners must find that a little too much.” And if I get over that hurdle, then the same things will be asked about *nattō* (fermented soybeans).

The same is true about the language. Many Japanese are not only convinced that Japanese is unique, but they *want* it to be that way. To be told that it is not necessarily so is a disappointment to them. Nothing makes them happier than to say that Japanese is untranslatable. To suggest that it might be translatable makes them unhappy.

My problem, however, is that I cannot go along fully with this attitude. I do think it is true that Japanese is in some respects unique and that it is in some respects untranslatable. But so is every other language. And the more deeply you go into a language, into the heart of its inner poetry, metaphors, and private ways of communicating, the more unique and untranslatable it becomes.

日本語は他の言語に比べて、日本料理は他の国の料理に比べてユニークであると思っている日本人がよくいるとパッシン氏はいうのである。厳密な意味でユニークとは、一国だけにある、その他のすべての国にないような特性といえるのではないだろうか。それに近いユニークさを日本に探すとすれば、三章(四)で述べた「武力的侵略」がなかったということではないだろうか。ユニークの定義を最大限にゆるめたな

らば、どこの国もユニークだといえる。

第五章 日本とヨーロッパの社会的文化的背景の比較

一節 respect と差別

ヨーロッパの respect は、人間はすべて平等であるという意識から発する。同じ会社の社長も平従業員も、人間対人間の関係においては平等であるが故に、仕事以外の個人生活においては対等に交際する。いや仕事の上でも、対等の意見・批判を述べ合うことになる。年齢が上だから一目置くということはない。この職場では経験年数が長いから威張っているということもない。兄に対して弟が絶対服従ということもない。ウチの者とヨソ者との差別意識もない。従って他人に対する閉鎖性も人見知りもない。従って他の国の人の中に融けこんで行くことができるし、人見知りもない。更にその意識は他の国、他の民族に対する優越感も劣等感ももたずに尊重する。他に対する respect は裏を返せば自分に対する pride につながってくる。

一方日本では差別がいたるところに見うけられる。同じ会社の社長と平従業員は会社の仕事が終わっても、従業員は社長のカバン持ちをして、飲み屋にお供すれば、かしこまってお世辞を言わなければならない。学校の後輩は先輩の言うことをきかなければならないし、編集部員は営業部員よりいばる出版社もあるというし、小さい会社の社員は大企業の社員に対して卑屈になったり、つっぱったりという現象も生れてくるし、よい肩書きを求めるようになり、若者は一流大学に憧れることにもなる。このような意識は、知人には愛想よく、他人には冷淡になる。他の国の人に対しては、人見知りしたり、あがって何も言えなくなったりもする。一方発展途上国の民族を軽蔑する結果にもなる。

二節 社交性とのつきあい

ヨーロッパの社交性と日本のつきあいとは本質的に全く異なるものである。ブラウダの元東京特派員、オフチニコフ氏の言葉に耳を傾けてみよう¹²⁾。

知り合いの姿が目にはいると、日本人は、それが町の真ん中であろうと、電車がかれの方へ真っしぐらにやってくるころだろうと、なによりもまず、その場に立ち止まるのが義務だと考える。その次に、からだの腰のところで二つに折れてしまったのかと思うほど両手を伸ばしてヒザのところまですべらせる。そして、かがんだまま五、六秒間じっと動かず、それから目だけ恐る恐る上の方へ上げる。相手よ

り先に上体を伸ばすのは失礼なことなので、お辞儀をしているあいだ、お互いに相手の様子を目ざとくうかがわなければならない。……………中略……………しかし、あなたとうやうやしくお辞儀をかわしたのち、ふたたび町の群衆のなかにはいっていく日本人を見守っていると、たちまち、なにか神秘的な変化がかれの上にかかる。かれの上品な物腰、行き届いた心づかい、礼儀正しさはどこへ行ったのであろう！かれはいささかの注意も他人に払わず、人波をかき分け進んで行く。通行人の中に、あるいは同じ車内に乗り合わせた者に知り合いの者がいないかぎり、日本人は、かれらを生き物として見ない権利があると考えている。バスに乗るとき、良心の呵責も感ぜずに、乳飲み児を背負った女を押しよけることもできる。ヒザとヒジを使って、隣にいる者とこづき合いをやるのもかまわない。ただし双方とも、そうやるのは群衆の一部分としてであって、ひとりの個人としてではないというふりをしなければならない。

群衆のなかで突如、乱暴者になったあなたの知人にここでまた声をかけると、もう一度あの魔法のような変身を目にすることができる。かれはまたもや、微笑をたたえて、心づかいのこまやかな、上品なほど礼儀正しい人物となる……ただし、あなたにたいしてである。日本人の礼儀正しさは個人的関係の面に限られているものであって、社会の一員としての行状にはまったく関係がない。

知らない人同士が電車の中で、眼と眼が合えば、日本人の場合、互にスーッと視線をそらすか、互にくにくしげにしばし睨み合う。極端な場合には、「テメエ、ガンつけやがったなっ！」と、顔をかさねばならないはめに陥ることさえある。

ヨーロッパ人だったらば、ウィンクをし合うか、軽い微笑をかわすか、さもなければ話しかけてきて、それが長話しに発展することにさえなる。ヨーロッパの社交性は、知人であろうがなかろうが、関係はない。パーティで、誰か独りしょんぼりとたたずんでいたら、他の誰かが声をかけて仲間の中に連れて行って一緒に楽しむ。これは後で述べるヨーロッパ人の「自分の時間を大事にし、自分のたった一度の人生を大切に楽しむ」観念と切り離すことはできない。日本のパーティで女の子が独りしょんぼりとしていても、声をかける人は少ない。もしも男性が声でもかけたら、これも後で述べる、日本人の陰湿なセックス観から、誰かに「いやらしい男」と勘ぐられることさえある。ただし日本の場合、飲み屋で隣り同士で飲んでいる中に、学校の同窓生だったことがわかったりすれば、忽ちにして百年の友となるのは、「ヨソ者」が突如として「ウチの者」とわかったときに、二人の「つきあい」が始まるのである。従って

「社交性」は「respect」の意識と、そして「つきあい」は「差別」の意識と密接な関係があるわけである。と同時に「つきあい」は後で述べる「身内意識」とも深いつながりがある。

三節 「人生を大事に」と「身内意識」

五章二節でも触れたように、ヨーロッパ人は永遠に一度の自分の一生を大事に生きようとする。だから自分の時間を大切にし、自分の家庭を大切にすることにもなる。An Englishman's home is his castle. という諺もある位だ。日曜、祭日はもちろん、有給休暇は必ずずっとも同じ職場の人は当然のことと考える。高給社員は別としても超過勤務は殆んどないと言ってよい。そして休日には人の集まる繁華街はできるだけ避けて静かに過す。

日本では身内意識を大事にする。そしてヨソ者を差別隔絶する。この意識を悪用してやくざは、親分子分のさかずきをかわし、兄弟分の契りを結ぶかと思えば、政治家は当然のように派閥を作る。会社では社長が従業員の仲人を買って出て、お家安泰をはかる。従業員は家庭を犠牲にしてまでも会社のために尽くす。自分の自由な時間どころか、島田常務のように自分の命さえも会社に捧げる人が後を絶たない。日本の繁栄は、底辺にまで普及した教育と日本人の勤勉と頭脳のたまものではあるが、自分や家庭を犠牲にして会社に尽くす日本人を、ヨーロッパ人は不気味な民族と思うのではないだろうか。自分の人生を、欧米人のように、おおらかに楽しむことを罪惡視する日本人はいないにしても、輕蔑したりうしろめたく考えたりする日本人がまだ居るのではなかろうか。

身内意識、ウチの者意識は、仲間意識あるいは仲間ぼめ意識に変形する。そして論理よりも感情を大事にする日本人の会議は議論の場ではなくなってしまうのである。

又、身内意識は集団徒党をなし、海外へ出たりすると日本人だけで集まり、現地の人又は他の国から来た人たちの中に融け込もうとはしないのである。

四節 議論好きと議論下手

ヨーロッパでは赤ちゃん言葉はあるが、日本よりずっと少ない。親は子供に論理的に物を言うことを教えると共に、勇気を持つことを教える。子供たちは「弱虫」とか「甘ったれ」と仲間から言われることを一番嫌う。学校へ入ると、教師は生徒に小さいミスなど無視してどしどし議論をさせる。教室では教師と生徒又は生徒同士の激しい議論が常に行われる。社会全体が議論を大事にする風潮がある。なぜならば、昔か

らヨーロッパでは隣りはどこの民族の人間かわからない。だからどういう考えを持っているかわからない。互に理解する方法は言葉による論理的話し合いしかないのである。その上、五章一節で述べたように、年齢が若くても「お前は年下の癖に生意気だ」とか、「書生論議だ」、「青くさいことをいうな」というようなことはいわない。平社員が社長の顔色をうかがったりする必要もない。老人もどしどし若者と同じように意見を言ったからとて、「いい年をして」などという陰口はない。

しかし日本の場合は、論理より感情を大切にするし、小さい時から議論をすると「生意気だ」とか「うるさい」と年長者に言われるので議論の訓練ができていない。その上、恥ずかしがりや屋で他人の顔色を見る習慣がついていて、謙虚とか和の精神が美德とされているので議論はどうしても下手になる。

五節 個性と察し合い

ヨーロッパの小学校の優等生とは、ユニークでオリジナルな意見を持つ子である。日本ではミスの少ない子ということになる。例えば十人の日本人がレストランに行くと、一人一人が違うものを注文したら、いやな顔をするのが普通である。しかしヨーロッパで、「あなたと同じもので結構です」などと食物を注文したら、いやな顔をされるのである。ヨーロッパ人が日本人の結婚式に東京で招待されて驚いた。招待されている人はお葬式のように静かで、毒にも薬にもならない形式的なことばかりいっていたという。仲人や上座の人にばかり気兼ねしているという。どこの会議でも、上役、年輩、経験者の顔色ばかりうかがっている。

日本人には察し合いの気持ちがある。これがいろいろな形になってあらわれる。思いやり、他人の顔色を見る、勘ぐり、お節介、邪推等は察しあいの変形である。「察し合い」という特性がプラスに作用すれば、「思いやり」となり、マイナスに作用すれば「他人の顔色をうかがう」、「勘ぐり」、「お節介」、「邪推」という形をとることになる。「察し合い」という特性は日本人にもヨーロッパ人にもあるが、日本人の場合はマイナスに作用し、ヨーロッパ人の場合はプラスに作用する傾向が強い。

- 1) 増田四郎編「西洋と日本——比較文明史的考察」(中公新書)
- 2) Charles C. Fries: American Linguistics and the Teaching of English
- 3) Robert Lado: Linguistics across Culture
- 4) 講座・比較文化 第八巻「比較文化への展望」第四章 比較文化へのアプローチ 七 言語と文化
- 5) 増田四郎「ヨーロッパとは何か」(岩波新書)
- 6) 犬養道子「私のヨーロッパ」(新潮選書)

日本と諸外国との社会的文化的背景の比較

- 7) 本多勝一「極限の民族」第三部 アラブ遊牧民
- 8) ピーター・ミルワード「日本人の日本しらず」
- 9) 大宅壮一「東欧の裏街道を行く」
- 10) 井上忠司『『世間体』の構造社会心理史への試み』
- 11) 会田雄次「日本人の意識構造——風土・歴史・社会」
- 12) 源 了圓「義理と人情——日本の心情の一考察」(中公新書)
- 13) 朝日ジャーナル Vol. 22, No. 36 「間違いだらけの『日本人論』」
- 14) Herbert Passin: Language and Cultural Patterns
- 15) フセワロド・オフチニコフ「一枝の桜——日本人とはなにか」

(こばやし よしや 本学助教授 英語)